

## 学校教育課だより

## かけはし



学校教育課だより  
「かけはし」  
【第 3 号】  
平成 29 年  
6 月 28 日発行  
御殿場市教育委員会  
学校教育課

## 充実感のある生活

教育部次長兼教育総務課長

鈴木 秋広



六月は一年のうち唯一祝日のない月ということは何となく寂しい感じがしますね。それでは祝日ではないものの記念日ではどんな日か思い浮かびますか？「父の日」は言わずもがな、「ネツシーの日」、「おまわりさんの日」、「ドレミの日」、それに「スーパーマンの日」なんていうのもあったりしてどれも興味深いのですが、「時の記念日」を挙げる人も多いのではないのでしょうか。そこで今回は「時の記念日」にちなんで時間についてのお話を少々。

さて、皆さん、若い頃に比べて一年が早い、逆に一日が長いと感じたことはありませんか。小さい頃は遊びに夢中で「まだ遊びたい」とか「もう帰らなきゃいけないの？」なんて思っていたのが、「まだこんな時間かよ」とか「今日の会議やけに長いなあ」なんてつぶやく自分がいたりして。単調で退屈な生活を送っている人ほど時間の経過が遅くも長くも感じるそうです。このような現象を「ジャーネーの法則」と呼ぶそうです。詳しい解説はウイキペディアなどに

お任せするとして、ここでお話したいのは、子どもの時間に対する感覚についてです。なぜ子どもは一日が終わるのが早く感じるのでしょうか。それは発見や体験が多いからなのだそうです。見るもの、触るもの、やること全てが初めての経験や出来事の連続の毎日。それらの一つ一つが、思い出や記憶となつて心に刻み込まれていくのです。一方、社会というものを一通り経験したことで新鮮さや驚きに出会う機会が減ってしまった大人は、思い出や記憶に残る出来事が少ないばかりか、過去の類似体験と混同、上書きされがちなのだそうです。ジャーネーの法則では、過去を振り返った時に感じる時間、「時間感覚」というものが重要なのだそうです。

御殿場市の教育は、子どもの発達課題の共有を重視し、幼・保・こ・小・中連携一貫教育の積極的な推進を強く意識されて実践されています。人生で最も大切な人格の基礎は幼児期に形成されると言われていますし、ジャーネーの法則の観点からも、幼児期の体験や様々な経験は、子どもたちが御殿場市の未来を担う「真つ当な大人」に育つためにも欠かせないものだと思います。何かと多忙を極める教員の皆様ではありますが、子どもたちが多くの発見や体験を通して日々充実した生活を送れるような教育プログラム

の工夫に期待しております。最後に、毎年一年を振り返った際に、充実感や満足感を実感できるよう日々新しいことに挑戦する。私たち大人もそんな生活を送っていれば、年齢に関係なく時間は平等に流れるのかもしれないですね。

## 一年生の教室を

## 訪問して

教育指導センター

主任指導員

瀬戸 亮策

四、五月は、入学した一年生の子どもたちがどのように小学校の生活や学習に適應できているか、芹澤ゆき子指導員と一緒に参観させていただきました。子どもたちは、小学生になったという喜びと「今日は何をやるの」という期待感で、ワクワクしながら登校していたと思います。

そんな子どもたちが、新しい環境に適應するための第一歩として「担任の話や指示を聞く」があります。そこで、ポイントをいくつか紹介しましょう。

まず一つ目は、話術です。園の先生方の話し方に惹きつけられてきた子どもたちは、小学校でもお話をする先生が表情豊かに声のトーンを抑えながら、ゆっくり短く子どもたちの目を見て話してくれると、どの子どもも安心して先生の方に顔を向け話を真剣に聞いていました。そんな子どもたちは、その後、指示通りにさつと取り組んでいました。

二つ目は、机上の整理です。机上に何かあれば、子どもは触りたくなります。ですから、必要な時に必要なものを出させたり、必要がない時は机の

中にしまわせたりすることがとても大切です。園でも使っていた「グーパーピン」という言葉が一年生の教室でよく聞かれましたが、「手はお膝」を付け足していた学級ではさらに効果がありました。

三つ目は、黒板です。黒板は、朝からいつも子どもたちの目に飛び込んできます。入学したての子どもたちは、文字に慣れていません。そこで、平仮名の学習に慣れるまで文を読ませることは難しいと考えて、絵や図を黒板に貼って指示を出す工夫をしていた先生がいました。特別な支援を意識した配慮が、入学したての子どもたちにとっても有効だったと思います。

学習も生活も「話や指示を聞ける子」を大切にしたい丁寧な御指導、ありがとうございます。

また、特別支援学級では、入学したお子さんの障害やそれまでに構築されてきた人間関係によって、子どもたちの落ち着きに学級差がありました。しかし、この二か月で、どの小学校でも「教室はみんなが学習する場」が、子どもたちに浸透してきたと思います。

す。学習の準備や協力学級との調整等が難しい中で、担任の先生、支援の先生、御指導ありがとうございます。



## 学校教育課

### 研修会報告

指導主事

丹澤 謹志

市内各園・学校におきましては、五月に予定されていた行事も無事終了し、今後は園内・校内の研修が充実されていくことになるかと思えます。また、平成二十九年度は新学習指導要領改訂に向けた「周

知・徹底の時期」と位置付けられており、各園・学校の校内研修も柔軟な対応や変化が求められます。特に、来年度より新指導要領が全面実施される幼稚園や特別な教科道徳が導入される小学校では、一層の認識と共通理解が必要です。

一方、園や学校現場では、今まで各園・校を支えてきてくださいましたベテランの先生方の退職に伴い、組織の若返りが進んでおります。この若返りは、園や学校が活気に満ちて元気になる面もありますが、反面、組織力全体の低下も懸念されます。そこで注目されるのが、「ミドルリーダー」の育成と活躍です。学校教育課では、このような背景に伴い、平成二十八年度より「学年主任等研修会」を新設しました。本年度は二年目の実施となります。

学年主任等研修会の目的は、学年主任等の立場にいる職員がミドルリーダーとしての自覚を持ち、積極的に学年運営、学校運営に関わるとともに、若手教員の育成にも努めることにあります。また、今年度より「学校教育課教育指導セ

ンター」が本研修会の組織運営を取り扱い、研修の充実が図られています。本年度は教育指導センター瀬戸亮策指導員が講師となり、「学校の核として」をテーマとした講義・演習が実施されました。

瀬戸指導員は、チームリーダーには、プランナー・メンター・ファシリテーター・コーディネーター等の立ち位置があることや、組織を協働的に動かすには、人を巻き込んだり、責任を持たせて任せたりすることが重要であること、若手を育てることの大切さ等を、学校現場の具体的な事例に照らし合わせて講義を進めてくださいました。また、演習を通して、自分自身のリーダーとしての強みを考えたり、年配者や若手にどのような声かけをするのか、場面を設置して話し合ったりしました。

改めて自分の立場と役割を考える機会となりました。自分が意識していることや力をつけていかなければならないことがわかった気がします。自分が学校組織の中でどんな立場にいるべきか、これからどんなことで貢献できるのか考えることができました。

当たり前チエックのおかげで今日から少し意識した声かけができています。

これらは本研修会参加者の感想の一部です。多くの経験値から構築された瀬戸指導員の講義は現実感と説得力があり、各研修員の心に深く落ちている様子でした。ミドルリーダーの立場を自覚して、明日からの自分を変えようと思った方も大勢いらっしゃったことと思います。

今後も学校教育課、教育指導センターが一体となり、研修の充実に取り組んでいきます。陰日向となり、学校現場の先生方を支えていきたいと思っておりますのでよろしくお願い致します。

